

シンポジウム

みんなで創る明日の美ら島^{ちゅ}
～「農」から考える魅力ある地域づくり～を開催

沖縄における農地・農業用水等の農業資源や農村景観並びに農村に残る伝統文化をいかに子どもたちに継承し、より魅力ある農村を創っていくかを考えるために、平成18年10月28日(土)「みんなで創る明日の美ら島～「農」から考える魅力ある地域づくり～」(主催:沖縄総合事務局)のシンポジウムを名護市多目的ホール(名桜大学内)で開催しました。



真喜屋小学校の発表



北部農林高校の発表



平成19年度から農地・水・環境の良好な保全とその質の向上を図る新たな対策として「農地・水・環境保全対策」を導入します。この対策を農業関係者はもとより、普段農業とは関わりが少ない一般県民に広く理解を深めるためのシンポジウムで、会場には約160名の聴衆が詰めかけ、地域の取り組み報告やパネリストの話を熱心に聞き入っていました。

■ ■ ■
前半は、地域における取組状況の発表が行われ、まず名護市立真喜屋小学校4年生児童が「田んぼの生き物調査に参加して」と題して、今年7月に羽地大川、真喜屋大川で実施した田んぼの生き物調査の結果を自分たちの

感想を交えながら報告しました。次に、沖縄県立北部農林高校園芸工学科の生徒が「地域との交流から学ぶ『農業』の魅力」地域活性化を目指した特産品作りから環境教育まで」と題して、地域の保育園や小学生との野菜栽培を通じた交流活動や、地域の愛好家からの助言を得ながら二千鉢以上のナゴランを増殖させ、地域に根ざした身近な花として定着させるプロジェクトについて報告し、「ナゴランの香りあふれる名護市になれるよう、情報発信を続けたい。」



パネルディスカッション

と述べました。

さらに、今年度農地・水・農村環境保全向上活動支援実験事業を実施している名護市運天原地区の島松記区長が「共同作業による集落環境の保全」と題して、地域の各種団体が連携し、農道などの草刈りや蕎麦を利用した耕土流出防止対策の実施状況について報告しました。

● ● ●

後半は平良武康氏（沖縄県立農業大学校校長）、玉村かおり氏（那覇市立安謝小学校教諭）、西江重信氏（環境NGOグループ・エコライフ主宰）、

野原弘彦氏（沖縄総合事務局農林水産部土地改良課長）の4人をパネリストとするパネルディスカッションが行われ、教育と農業の関わりや都市と農村の交流など活発な意見が交わされました（コーディネーター：国吉克俊氏 琉球新報社論説委員長）。

玉村氏は田んぼのない都市部でバケツによる稲の栽培を通



パネルディスカッション後の質疑応答

じて、児童の農業に対する意識が変化したことを紹介。「風習や自然を教材に、その由来や意味を正しく伝えながら、残そうとする気持ちを育てたい。農業と子どもをつなぐ役目が教師の仕事だ。」と述べました。

平良氏は「農村で農業をしている人と、都市住人との間で若干農村に対する価値観の違いがあると思う。都市の人にとって農村は非日常であり、癒やし・安らぎの空間となるだろうが、農業に携わる人にとっては日常生活の場。環境保全や継承に

ついては、農業における生産と生活の持続的な観点からも重要だ。」と述べました。

西江氏は「これからの環境学習の担い手は、実際に農業に携わっている農村のシニアが一番適している。農村のお年寄りのちのパワーを借り、農村を再生するエネルギーを養いたい。」と述べ、また農家が都市部の人を受け入れ、共に農業体験を行う民泊を提案しました。

野原氏は「沖縄の豊かな自然、歴史、文化の中で、特に農村部は隠れた資源がまだまだたくさんあると思う。それらを活用しながらどのように地域や農業、農地を守っていくのか、防風林や耕土流出などの問題について地域の人たちが考え、できることから活動していくことが必要。」とパネルディスカッションを総括しました。

なお、会場には北部農林高校の生徒が栽培したナゴランも展示され、聴衆を和ませていました。

「農地・水・環境保全対策」につきましては、広く県民の理解を得て活動の輪を広げ、定着させていきたいと考えています。